●１２月選評

小島なお

・源楓香（北海道）

私たち存在ごっこ

前髪で目を隠したりして

目を隠したり、耳を塞いだり、口を噤んだりすることで存在に近づくことができる。感覚することがいつでも存在を危うくするのだから。

・からすまぁ（神奈川県）

バウムクーヘンの

同義語は

終わるなんて思ってなかった関係

いつも、いつまでもつづく同心円状の関係。バウムクーヘンの切り口のように。しかし真ん中に穴が空いていることを忘れてはいけないのです。

・加藤 美紀（愛知県）

新幹線並走しているＪＲ

このスピードでみんなに会いたい

ほんのひととき、電車と新幹線は並んで走る。ほんのひととき、私も時速３００キロでどこかへ、だれかへ向かっている。

・ササキリ　ユウイチ（群馬県）

石化した三半規管拾い春

木が葉を落とすように、さなぎが蝶になるように、私たちは三半規管を捨てる。春は平衡感覚のいらない季節なのだ。

・岩槻　怜（広島県）

拝啓、みたいに

えっ

て言う人

拝啓、と書くことでとりあえず落ち着いて書き出すことができる手紙。えっ、と言うことでとりあえず落ち着いて話し出すことができる会話。

・風見みどり（東京都）

春、過ぎて

どこにもいけないわたしをゆるし

て

私は季節じゃないので、夏来たるらし、とはいかない。どこへも行けないという存在の罪はいったいだれが許してくれるのだろう。

・広田　土（大阪府）

蓮根の穴からきみを眺めたら

横に知らない人が映る

ぼくは穴に肉を押し込む

穴は決して覗いてはいけない。向こう側には決して興味を持ってはいけない。それは昔からの決まり事。覗いてしまう前に肉を押し込んでおくべし。

・桜咲（千葉県）

「いつも」を

思い出せなくなったら

ニューパラダイスの

始まりだ

「いつも」は安心を餌にして私たちに考えることをやめさせる。「いつも」を忘れたところから詩ははじまる。楽園では主体性が必要。

・中矢　温（東京都）

文字盤に雪を降らせる遊びらしい

塾通い詰め真白な手首

時計の薄く狭い硝子に降らせる雪。なんてさみしいあそび。雪の日は、意味も理由も道理も倫理もないところに心を置いておく。

・立花ばとん（東京都）

浮寝鳥レシートの墓に向かう

水上に浮かんで眠るのが浮寝鳥。この世に捨てられた数え切れないレシート。生

きていたことの証拠としてレシートは一日一日の墓となる。